

視点の発達言語心理学的研究

——時間と視点, 話法: その文献研究(1)——

鈴木 情 一*

(昭和63年10月25日受理)

要 旨

本稿では、視点に関する発達言語心理学的研究の中で、特に時間・時制表現の理解における視点の移動の役割を検討することを目的として、その背景を成す様々な文献の整理と分類をおこなった。

心理学や言語心理学の領域では、これまで、「過去」や「未来」といった時制(tense)の理解能力や、Piage 以後に行われた時間概念の習得に関する研究は数多くあるが、文、文章、談話、物語テキスト等に内在する時間的特徴に関する研究はほとんど行われてこなかった。

ここで取り上げた内容は以下のものである: 発達心理学における「時間的脱中心化」能力についての研究、その背景を成す「人間の概念的な分裂」、「分身」とその移動に関わる認識論と言語学からのアプローチ、そして視点の分化と統合にもとづく言語の発達理論、最後に物語世界への参加についての考察、である。

KEY WORDS

point of view	視点	temporal shift of a point of view	視点の時間的移動
the world narrated	物語世界	temporal expressions	時間表現

導 入

本研究は、時制・時間表現(tense & temporal expressions)と視点(A point of view)との関係についての発達言語心理学的なモデルを構築することを目指した文献研究である。時制・時間表現と視点との関わりについては、言語学や認識論の領域で多少とも追究されてきてはいるものの、心理学や言語心理学の領域では、一部の内容を除いて、ほとんど対象外に置かれていた。

ここでは、文レベルから談話・物語レベルにいたるまでの時制・時間表現に関わる文献を、「現実世界と可能世界」における「視点(座)とその時間軸にそった移動」という概念をその中心に据え、これらの概念との関わりで、類型化し、かつその要点を記述してみる。言い換えると、「視点(座)の時間軸にそった移動」を提唱する理論とその要点を紹介すると同時に、この概念によって記述の可能な言語産出・理解に関わる研究を、様々な研究領域から取り上げ、

* 幼児教育講座

分類するという試験的試みを行う。従って、概観する学問領域は心理学、言語心理学に留まらず、言語学、国語学、哲学、物語論(Narratology)といった広範な領域に及ぶことになる。なお、ここで言う「視点」とは、言語とその産出・理解の過程に含まれる認知的機能に関わりをもつ概念に限定されたものである。

1. 幼児期初期の時間的脱中心化能力とその発達に関する研究

1. 幼児期初期の時間的脱中心化能力に関する研究

心理学の領域における「視点」の研究と言えば、Piaget, J. & Inhelder, B.(1948)の「3つ山問題」(The three-mountain's problem)に代表される「空間的脱中心化」(A spatial decentering)能力の発達に関する研究が思い出される。脱中心化能力は、幼児の特性である自己中心性との関わりで提案された概念であり、その後の研究者の用語を借りて言い換えるならば、“A perspective-taking ability”に属する能力でもある。この能力には、“A spatial perspective-taking”の他に、“A social perspective-taking”や“An affective / emotional perspective-taking”などが区分され、それぞれかなりの量の研究が公表されている。しかしながら、“A temporal perspective-taking/A temporal decentering”についての研究は数少ない。

考察の範囲を幼児期の時間概念やその習得一般にまで広げるならば、時間概念の理解や発達に関する研究、時間を表現する用語や基本的な時制の理解・産出に関わる研究といったものは数多い。しかし、本稿では取り上げないことにする。これらの研究を概観するには、次の研究等を参照されたい：Beilin, H. (1975), Kuczaj, S. A., & Boston, R. (1982), Friedman, W. J. (1978), etc.。取り上げないとは言っても、例えば自分が過去に体験した事を幼児が過去形を使用して話すことは、時間的脱中心化のきわめて安定した証拠であり、その時点で幼児は物語世界の入口にさしかかっていると言えるなど、視点の時間的移動に関わるという意味で重要な研究であることも事実である。参考となる研究を1例挙げておく：Miller, P. J., & Sperry, L. L. (1988)。

本稿で使用する「時間的脱中心化」という概念について簡単に触れておく。この概念は、Kuczaj, S. A., & Boston, R. (1982)で解説されている「時間的準拠系」(A temporal reference system)における「第1次準拠点」(The primary reference point)の獲得後に習得される「第2次準拠点」(The secondary reference point)によって可能となる能力に近いものである。いやむしろそれを前提とするものである。

幼児がこの2次(3, 4次)準拠点を獲得すると、過去や未来を自分の現にいる「現在」(「今」, 「今日」等)に関係づけることができるだけでなく、過去を未来へと、未来をさらなる未来へと関係づけることができるようになる。それどころか、他者の準拠点を取り入れ、そこに定位して、他者の過去や未来をも「生きる」ことができるようになるのである。現実世界の記憶としての過去やその延長・期待としての未来世界だけではなく、創造的想像の世界(物語世界, 可能世界)への飛躍も可能となるのである。

つまり、現に・今・ここに、ある「自分」以外に、発話のそして理解の「原点(Origo)」(Bühler, K., 1984)を設け、そこを起点とした認知的な構成やそれにもとづく言語・記号表現が、さらに

又理解に必要とされる再構成が、可能となるのである。そうした能力は「語りの世界」を具現する漫画、アニメ、絵本はもとより、物語表現などの理解の基礎を作り出す能力でもある。幼児期の時間的脱中心化能力を仮にこのようにおさえ、関係する研究を概観することになる。

まず、この能力に関係する概念とそれを提案している著者とを挙げておく：Cromer, R. F. (1971)の“The ability to decenter temporally”, Kuczaj, S. A., & Dally, M. J. (1979)の“Hypothetical reference”, Sachs, J. (1983)の“Displaced reference”が直接関係するものである。他に、Bates, E. (1976)の“Decontextualization”, Baron, N. (1977)の“Indirect reference”, そして Harner, L. (1976,1980)の“Past and future reference”等も関係する概念・研究である。

こうした研究の中から、時間的な脱中心化能力（時間的な視点（座）の移動）を調べる方法面に焦点を合わせ、代表的な2つの研究を選択した。それは、Cromer, R. F. (1971)の「時間的脱中心化」能力に関する論文と、Kuczaj, S. A., & Dally, M. J. (1979)の「仮想的指示」能力の論文である。ここではこの2つの論文の分析・検討を行う。

(1) **Cromer, R. F. の「時間的脱中心化」能力に関する研究** このCromerの研究は、Piaget, J., & Inhelder, B. (1966)の“A spatial perspective-taking”に関する研究を、いわば時間面に展開したものである。彼は7枚の絵から構成されている物語を材料として、3歳11カ月から7歳4カ月の子ども達に、次のような2種類の課題を与え、その時間的脱中心化能力の発達を検討している：「1枚の絵に登場する人物を指摘する」⇒「その人物が発するであろう発話を選択させる」, 「ある発話を呈示する」⇒「その発話を発している話者を含む絵を選択させる」。

これら2種類の課題は、視点論的に翻訳するならば、前者はある視座（たる人物）を指定され、その「見え」を可能とする視座を同定する課題である、と言えよう。

ポイントとなるのは、選択肢となる発話の含む時制表現である。時制表現としては「現在」、「過去」、「未来」、「現在完了」等が含まれている。2種類の課題のうち、前者を例にとるならば、7枚の絵の中で3枚目に登場する人物が指摘され、その人物がその絵の中（物語の世界）で話すであろう発話を選択肢として提示される。この場合は登場人物が、物語世界の中で、現に・今・ここ、で体験している内容に相当するので、「現在」形が正答となる。

同じ内容（命題）を含む同じ人物の発話でも、最後の絵を指摘され、その人物が物語の世界の中ですでに経験した事を、同じく物語世界の他の登場人物に話す場合では、その時制は「過去」形となる。

この2つの問題で正しい答を選択できる子どもには、子ども自身が、現に・今・いる世界とは区別された絵によって示される物語の世界とその中に登場する人物の「今」・「ここ」を取り入れ（又は、定位して）、その視点（座）から発話を再編成できる能力が備わっていることになる。

さらに、そればかりではなく、物語の最後の絵で主人公が「物語の世界」において過去に経験したことを話す場合には、それが同じ物語の世界の出来事ではあっても、すでに過ぎ去った事であり、その表現では「過去」形を使用しなければならないことを知っていることになる。

これらの課題は単純な“Perspective-taking”だけではなく、登場人物の視点に立った上で、その人物とともに物語の世界の「時」を生きていく能力（物語の中の世界における時の経過と、そこに生きている人物による時の体験を追体験する能力）が必要とされるのである。

この実験の結果、2種類の課題に成功し、完全な脱中心化能力を示すのは、MAで5歳11カ

月であることがわかった。Piagetによって明らかにされた空間的脱中心化と比較すると、数カ月の遅れとなる。

この実験では、幼児は物語世界の中に入り込んでその「現在」と「過去」とを区別する能力が必要とされる。しかしながら、問題が1つある。それは著者の指導した卒業論文の結果にも認められるものである。4, 5歳の幼児に文字無し絵本を与え、その内容を説明する課題を与えると、内部視点で説明する幼児（お話しの中の人物の立場に立って、その発するであろう発話を語る幼児）と外部視点で説明する幼児（絵の内容を対象化して、自分の立場から実験者に説明する幼児）とがいることがわかったのである。この区別は、「叙述型」、「解釈型」（岩淵・他, 1968）といった表現で知られている個人差の1面である。個人差一般に関係する条件、幼児自身が課題に向かう場合に採用する視点、さらに課題と材料となる絵（本）の内容、課題の提示の仕方等をさらに吟味する必要がある。

(2) Kuczaj, S. A., & Boston, M. J. の研究 この研究は、“IF”と“WOULD”,そして“HAVE”とを用いる条件文によって表現される仮想世界へのイメージ内での飛躍（又は、その条件文の内容が成立する仮想世界の構築）とその表現力の発達とを問題として取り上げている。

課題は、物語を読み聞かせ、その物語の内容について、「もしこの女の子がピアスを欲しがらなかったら、どんな事になったでしょう？」といった物語の中の出来事として記述されていた事柄から出発し、それに対する反事実（反出来事）的帰結を質問するものと、「もしもあなたが飛行機から落ちたら、どうしますか？」といった、記述された出来事をふまえながらも、当事者を作中人物から被験児自身に置き換え、その後の、つまり未来の帰結を問うものの2種類であった。前者は「過去への仮想的指示」、後者は「未来への仮想的指示」と名づけられている。

理解の指標は、そうした質問に対する幼児の反応の内容的妥当性と仮想世界に言及する場合に使用する語彙と構文とである。つまり、分析の指標は、条件を示す標識としての“IF”, 様相の助動詞“WOULD”, そして助動詞“HAVE”（過去への仮想的指示表現の場合）を使用するかどうか、又その使い方が適切であるかどうかにあった。

結果は2点に要約される。1つは、就学前に仮想的指示表現が可能となることである。2つ目は、過去への仮想的指示は未来へのそれよりも遅れることである。

仮想世界の成立や仮想世界への飛躍・言及能力を言語レベルで捉えるならば、それは一定の言語標識を使用するかどうか、使用できるかどうかによって示される。そうした標識の代表的なものは、様相の助動詞(“can”, “could”, “will”, “would”, “may”, “might”, etc.)である。幼児がこうした様相の助動詞を適切に使い分ける時期やその順序についての研究（例えば、Coates, J., 1988）は、幼児の中に仮想世界や物語世界が構築されていることを探る有効な手掛かりである。時制の使用とその発達の研究、様相の助動詞の使用とその発達の研究は、後に述べるように、幼児の中に形成される「もう1つの世界」を知る・探る研究への道を開くものである。

2. 視点（座）の移動に関わる言語発達理論

ここでは幼児の言語発達を視点論に近い立場・理論から展開している研究を紹介・検討する。これらの発達理論は視点（座）の時間的側面に焦点を合わせたものではないが、その展開次第では、そこに時間的側面を含めることも可能と考えられるものである。

(1) ヤコブソンの「幼児言語の文法形成に関わる4つの段階」 ヤコブソン, R. (1984) の理

論では、幼児期の言語発達に4つの主要な段階が区分されている。それは、①「1語文の段階」、②「主要単語の変容の段階」、③「述語づけの段階」、そして④「転位語（指示的表現、又は直示語）の相関的使用の段階」である。

これら4つの段階の中で、①と②の段階は特別の意義を有しない。逆に、③と④2つの段階は、彼によると、「幼児語の解放の段階」として重要な意義が与えられている。まず、幼児期初期の表現は、彼が現実にいる場面（現に、「今」・「ここ」に・いる「私」）に従属している場合が多いが、その従属からの解放を可能とする段階が③と④（特に、③）であると言う。

この「述語づけの段階」と名づけられた段階は、幼児の発話表現が主・述の形式をとる段階である。それまでは主に姿勢・位置・向き、そして聞き手との視線やまなざしの共有に頼っていた、つまり眼前にある事象だけを「話題」にしていた幼児の発話に、主語（情報論的には「話題」、格文法的には「主格」を表現する場合が多い）が現れ、「主語＋述語」の形式（又は、「話題＋評言」）を有するものとなり、その結果、述部に表れるさまざまな表現形式の助けを借りながらも、眼前にない事象の表現が可能となるのである。

ここで重要なのは、「話題」が、特に「話題の主」としての自分が出表されることである。例えば、自分のことを「アーコ」と表現する幼児の場合、言語的に表現された「アーコ」と発話主体としての「アーコ」とは区別される。前者は、「分身」としての自分であり、この表現が可能となるには、自己をイメージ内で対象化するという心的操作が必要なのである。自己をイメージ内で対象化するという操作は、同時にその分身が活動するイメージ内の「舞台」（村瀬，1981）の成立を前提としている。

しかしながら、「アーコ」はあくまで「固有」名詞である。自称詞として使用する場合も、他者が呼称として使用する場合も変化することはない。その意味で、「パースペクティブの転換可能な」表現ではない。パースペクティブの転換が可能となるには、人称代名詞を代表とする直示用語が必要となる。直示用語によって「場」がそれぞれの話者のパースペクティブから捉えられ、それらが各々その話者を原点とした「面」を形作り、それらの面はそれぞれの話者のもとにおいて統合され、それによって場の多様な認識が可能となるからである。

④の「転位語の相関的使用の段階」は、「過去形」と「人称代名詞」を代表とする直示語の獲得によって特徴づけられる段階であると言う。人称代名詞の中ではとりわけ1人称代名詞「私」の使用がこの段階に固有の発達を示すものである。こうした転位語（直示語）の使用によって「・・・自由で転換可能なパースペクティブの中で、発話状況と再度の結合をはたす」ことが可能となる段階であると言う。

この文章は直示用語の語用論的機能と会話状態を思い浮かべればわかりやすい。例えば、「私」という人称代名詞は、話者が変化するにつれてその指示する人物が変わる。さらに、「発話は話者に中心化されている」（Hörman, H. 1981）ので、それぞれの話者が使用する「コソアド」などの直示表現は、その時々話者の視点・視野からの表現として理解する時にはじめて意味をもつことになる。とりわけ、話者が次々と交替する会話では、「私」の指示する人物はもとより、それぞれの話者を原点とするパースペクティブも次々と変化することになる。原点としての話者とそのパースペクティブの変化は、同一事態（発話状況）を様々な側面から切り取ることになる。言い換えると、同一事態とその都度異なる視点から結びつくことを意味することになる。

相互に「転換の可能な」人称代名詞の使用によって、幼児の認識はパースペクティブの「横の広がり」を獲得することになり、人称代名詞に加えた「過去形」の使用によってパースペク

ティブの「縦の広がり」をも獲得することになる。「横の広がり」とは、パースペクティブを異にする他者との関わりを指し、「縦の広がり」とは、時間軸にそったさまざまな自分の「分身」との関わりを指す。

(2)有馬による「分化（視点の転換）と統合力の発達」としての言語発達 有馬（1986）の理論は、シンタグマ、パラディグマという2つの軸をもつ「連想」の構想をふまえ、「視点の転換と統合力」の衰退として分裂病を捉えようとする試みの中で示されたものである。

彼女は言語獲得の段階理論の基礎を、サリヴァンの言う記号的な把握能力の発達段階説におく。それは、①「プロトタクシス」（組み合わせの初源）、②「パラタクシス」（並列的な組み合わせ）、③「シンタク（シ）ス」（統一的組み合わせ）という3つの段階からなるモデルである。これは記号の組み合わせ方の発達段階であり、「統合力」の違い、その種類、そしてその複雑さの段階的進行を示すものと言えよう。

プロトタクシスの段階を、有馬は「場を一挙にひとつかみに」把握する段階であり、そこには、過去・現在・未来といった時間的区別もなく、前後・左右・上下といった区別もない、そして当然のように空間的距離の差異も認識されていない段階であると説明している。区別もないから、「関係づけ」も行われえないと言う。

この段階は、今井（1968）の表現過程の段階に照らし合わせるならば、その「直観的把握」の段階に相当するものと言える。この直観的把握は、①「表現せらるべき」、②「内に」、③「見られたる（考えられたる）」、④「全体」という4つの特徴を備えている。プロトタクシスの段階にある幼児の直観的把握にこれら4つの特徴すべてが備わっているとは思えないが、単に否定されるようなものではない。この直観的に把握されたものは、後のシンタク（シ）スの段階にあっても、そこで行われる「ことば」による「分化」と「統合」を、その背後にあって常に導くものであり、つけ加えるならば、「分化」を誘導し、「統合」の十全性を保証かつ検証する役割を担うものである。

パラタクシスは、「記号による単純な関係づけ」のできる段階であると言う。文を構成する単語を機能語と内容語とに分けると、機能語（の表出）を欠いて、内容語だけが「並列的」に、発話でいうならば、「連続的」に表出される段階に相当する。もちろん、発話のなされた場面や脈絡等を考慮することによって、2（3、4）つの語の間に一定の意味的關係を見出すことが可能である。母親による多語発話の理解がその典型的状況にあたる。

次のシンタク（シ）スの段階は、2語文、3語文といった多語文の使用される段階である。この段階でも「有意味な抑揚や語彙」は見出せるが、機能語や動詞は重要なものを除いて省略される傾向にあると言う。つまり、まだまだ「短い単語」と「機能語の省略」によって代表される時期である。視点の転換という面から見ると、（このような）「初歩的なシンタックス」の段階では、多様な視点を統合することはむずかしいので、単一の視点に立つ単文にとどまる傾向があり、相違する視点に立つ節を統合することによって生じる重文や複文は未だつくられることはない」時期であると言う。

有馬は彼女の言う「視点の転換と統合」についての概念規定もおこなっていないし、そこに引用している具体例もそれらを把握するのに決して十分とは言えるものではない。さらに、3つの段階で可能な視点の転換と統合の例を述べていないなど多くの問題をもつものではあるが、特に視点の転換統合の類型—異音の統合、社会習慣的な視点と私的な視点との統合、テキストとコンテキストの統合、連辭の軸・連合の軸それぞれにおける視点の転換と統合を提案してい

る点で、幼児の言語発達を視点の転換と統合力の発達という観点から捉える可能性を示唆するものである。彼女は「言語の発達を統合力の段階的な増大である」と見ているのである。

ここで、有馬の挙げている視点の転換と統合の例に加え、著者の分析例を挙げておく。「けんじはまさるをバカだと言ったが、さとしは優しい人だと言っていた」という発話（文）では、話者はまず「けんじ」の視点に立ち、その視点から対象となる「まさる」を「バカ」というカテゴリーで捉える。もちろん、その認識は過去の事であり、その認識をけんじの発言から得たという情報もつけ加える。次に、対象を同じまさるにおいて、「さとし」の視点に立ち（視点の転換）、その視点から「優しい」というカテゴリーで捉える。両者の採用する価値評価の尺度の違いは、逆接の接続詞「が」によって標識化され、同時に2人の人物に付加された対照を示す係助詞の「は」によって、そのコントラストが浮き彫りにされている。日本語の特徴より、話者の共感の後節に置かれていると判断されるが、話者とけんじ、さとしの関係が不明なので、決定的なことは言えない。マクロな分析はこのようになる。

次の例として、母親がある食べ物を息子に見せて、「マーくん、これ好きでしょ!」と言った場合を考える。この母親の問い掛けに対して、幼児が「好きじゃない」と答えたとする。この答えと「嫌い」という答えを比較すると、前者の場合は、自分の立場から自分の主張を行ってはいるが、母親の立場に引きずられており、その意味で完全な視点の転換とそれに応じた表現の選択ができていないと言える。

多少観点は変わるが、よりミクロな分析を試みる。「小さくて丸いお菓子」という表現の産出には、2つの視点からの対象認知とそれらを「お菓子」において統合する操作とが必要である。まず、対象としての「お菓子」を「サイズ」という点から認識する視点（カテゴリーの選択と適用を「視点」と称している）と「形」という点から認識する視点とが必要であり、そこには同一対象を2つの側面から捉え直すという意味での視点の転換が含まれている。さらに、「サイズ」と「形」という2つの視点からとらえた「小さい」という属性と「丸い」という属性を、「お菓子」の異なる2つの側面としてそこに帰属させるという統合の過程も含まれているのである。

ここではカテゴリーという尺度とそこに属する具体的な数値としての「小さい」、「丸い」とが視点として扱われている。

さらに語順が認識の順序を含むものとするならば、これら2つの認知には異なる時点での異なる認知が含まれており、その意味で2つのカテゴリーと数値とによる認知と統合の過程には時間的統合とでもいうべき過程も含まれていることになる。なお、この分析では語順と認知の過程とが一致することを前提としているが、今井（1968）では、表現上の語順と認知の過程とは逆の順序になると言っている。

有馬の分析例を詳しく検討する。彼女は、「花子さんが来たら、これを渡して下さい」という例を挙げ、分析を試みている。まず「花子さんが来る」という文節では、話者（依頼者）とあなた（聞き手＝被依頼者）の視点（アングル）から花子さんの移動動作を捉える。後に述べるように、「一た」という完了形が使用されているので、時間的視点（座）は、この文節の終了する時点では、「来た」時点に移動している。この意味で時間的視点（座）の移動（転換）も含まれている。

実は、この文全体の語用論的構造を分析すると、[[依頼する]:話者⇒聞き手([渡す]:聞き手⇒はな子)]といった構造が内在されているので、[依頼]の部分と[渡す]の部分では、視

点が話者から聴き手である「あなた」に移動しているのである。この場合の視点とは、動作主体の意味である。つまり、2つの文節間で視点（動作主体）の転換が行われていることになる。

その他に、有馬は、敬称（話者による話者と聴き手と花子さんという3者の人間関係の認識を反映する；ここでは「さん」という表現や「下さい」といった丁寧語）も視点の違いを含んでいると説明しているが、これはむしろ「視線の高さ」の違いを反映するものであろう（大江，1976）。

一見簡単に見えるこの例文でも、実に複雑な視点の転換と統合の過程（1つの文に、それに相応しい表現を使用してまとめあげること）を内在している。このように何らかの意味で視点の転換と統合の過程を含んでいる表現の産出や理解は、このシNTAX（シ）の段階に属する幼児には不可能である。

今後は、視点（視座、注視点、立場、観点、カテゴリー、価値基準、等）に関わる概念を分類・整理し、それらのより厳密な概念規定の上になつて、幼児の発話を分析する作業が残されている。もちろん、分析の枠組みをなすモデルの作成も必要となる。そのモデルは言語と認知の両面にわたるものでなければならない。Langacker, R. W.(1987)の「認知文法」が参考になる。

2. 時間軸にそつた視点（座）の移動に関わる理論的基礎

(1)「人間の観念的な分裂」と時間的移動

物語や文章を材料とする「視点」に関わる従来の心理学、言語心理学の研究では、その焦点が空間的な視点や知識・動機（利害）的な視点、そして視点の心理学的実在性の検証等に向向けられ、時間的な視点（視座とその移動・転換）についてはほとんど追究されてこなかった（Anderson, R. C., & Pichert, J. W., 1978, Black, J. B., Turner, T. J., & Bower, G. H., 1979, Pichert, J. W., & Anderson, R. C., 1977, 日本の研究では、上野（1981）等を参照のこと）。それどころか、視点の時間的側面についての研究の可能性さえ仄めかされていない状態であった。

何らかの意味で、人間の「分身」をその理論に導入し、その分身の「移動」等によって認知や言語の過程構造を説明しようとしている理論には、まず佐伯（1978）の「小人」、Ertel, S.（1977）の“Ego”、今井（1968）の「原視点」と「配賦視点」、そして三浦の（1973）の「観念的に分裂した自己」がある。

しかしながら、三浦を除いては、積極的に言語の時間的側面における分身の役割・機能を取り上げているものはない。そこで、ここでは三浦の理論を取り上げ、その特徴について概観することにする。

三浦（1973）は「観念的に分裂し、対象化された自己」についての理論を展開する中で、過去や未来といった時制・時間表現の産出や理解の過程に含まれる認知の過程の構造とその特徴について解説している。三浦の理論の要点を引用によって示すと以下の4点になろう：

①「言語のようにそれ自体が時間的経過をもたない表現の形式では、映画と逆に、読み手の方が視線を動かしていかなければなりません」、②「過去・現在・未来は、属性ではなく時間的存在である2者の間のあるいは2つのあり方の間の相対的な関係をさす言葉にはかなりません。これは客観的な関係です」、③宮下（1980）の言葉を借りるならば、「表現主体が対象を認

識するときには常に現在の関係で認識する」, ④「……表現を鑑賞する場合の追体験はすべて“夢”なのですから, すべて観念的な自己分裂がつきまとう……」

まず①は、「表現のうしろにある（話者の認識過程的構造に含まれる；著者注）時間的推移に対応して、観る者も時間的な推移においてうけとること」が読者に要求される読みであると言ひ換えられている。もちろん、読み手の理解とは単なる受容ではなく、積極的な再現的構築である。ここで言う時間的推移は話し手がその産出過程で行った「観念的な運動」であり、読み手はその観念的な運動を、話し手の時間的・空間的位置とその移動、そしてそれぞれの位置からの「見え」を追体験的に再現しながら、創造的に辿ることが要求されるのである。松岡(1982)の言葉を借りるならば、表現に託された図としての対象事象と同じく地としての「地平」をとともども、その語り手（又は、作中人物）に定位しつつ、その「まなざし」によって、時間的な推移の中で再現することになるのである。

②については、例えば話し手と出来事との関係を例にとると、話し手も出来事も、同じとは限らないが、絶えざる時間的な流れの中にある存在である。その話し手がある出来事を、自分の発話時点、又は彼が任意に設定した時間的原点（第2次準拠点等）よりも「前にある」と判断すれば、「過去形」で表現するものとなり、「同時にある」と判断すれば「現在形」で、そして「後にある」と判断すれば、「未来形」で表現する出来事となる。このように、時制は、話し手のとる時間的原点との関係で、すなわち「相対的」に変化する関係なのである。

③の「現在の関係」とは、例えば過去時制の文を話し手が生成する場合、話し手の分身は、再構築された過去の世界（その出来事の生起した時空間）へとイメージ内で移動し、対象事象と「同時的な」（つまり、「現在」の）関係で向かい合うことが必要であることを言っている。しかしながら、発話時点からみるならば、その出来事はすでに過ぎ去った事なのであるから、その関係を表現する必要がある。それは発話時点への分身の回帰という心理的移動と文末の「一た」という表現によって実現される。

④はもっと基本的なテーゼである。表現（この場合、映画、絵画、漫画、等々）を理解・鑑賞する場合、読者や鑑賞者は、作者（広い意味での）の創りだした想像世界を、時には語り手とともに「見聞きし」、又、時には作中人物とともに、その世界を「生きる」ことが必要である。その過程では、読者は、作者の表現に導かれつつ、時には「眼」だけの存在となり、時には「皮膚」だけの存在として、そして又、時には「重力を感じない」超人として、……その共時的世界をつかの間体験するのである。

三浦(1973)の理論は、どちらかと言えば、ことばの理解よりもむしろ産出の過程に重点が置かれている。そこでは理解が、読み手による語り手の追体験に還元されているかのようである。理解の過程は、西郷(1975)の言うように「同化」だけではなく、「異化」の過程をも含む「共同体験」である。言い換えると、単なる受容だけではなく、読み手の主体的な参加が要求されるのである。「読み」の結果、読み手に残るものとは、ある読者とある作品との相互作用の産物なのである。

この三浦の理論では、時間表現の機能的特性といった点には触れていない。後に触れるように、例えば語り手が顔出して、解説や説明をおこなう部分では、物語りの世界での時間が、読み手（聞き手）にとっては「停止」している。この場合、語り手の顔出し（一定の言語的標識によって表現される）は物語り内の時間停止を指示する記号であり、物語りの叙述や描写の開始は、その時間の再発を意味することになる。さらに、過去への回想表現の場合も、常にそう

とは限らないが、元の世界の時間を停止させている場合が多い。白昼夢では作中人物の夢想世界での時間(経過)が元の世界の時間(経過)に取って代わり、元の世界の時間(経過)は戻ってきた作中人物の、その世界における時間経過を示す手掛かり(単純な例は「時計」)によって判断されねばならない。さらに、過去を示す時制標識「一た」は語り手の(同時に、聞き手の)時間的原点(視座)の移動を示す標識であり、「一る」は物語の世界の時間がより現実的に近い、リアルな時間経過で進行していることを示す標識であること、等々については触れていない。この「一る」と「一た」交替のパターンは、作者(語り手)が、私達読者(聞き手)に、どのような物語体験様式を生成するかという目論見と関係する。要するに、物語表現に内々存在する様々な規則とその機能を明らかにし、同時にその習得を追究する必要があるのである。

なお、宮下(1980)は、過去時制の表現については「観念的に再現した」、未来時制については「観念的に創造した」という言葉を使って両者を区別している。

(2)時間軸における視点(座)の移動——言語学の知見より——

三浦による認識論的追究とは別に、言語学の立場から、文の産出と理解には時間軸にそった視点(座)の移動が必要であることを明らかにした研究がある。牧野(1978)、國広(1976)、柳原(1977)等である。その他に、樺島(1971)は、山下清の文章を分析し、彼の文章はそうした移動を示す典型的な事例であることを明らかにしている。

①國広(1976)による日英語比較からの分析 彼は日英語を比較分析する中で、日本語の表現と英語の表現では、視点(座)とその移動の様式に根本的とも言える違いがあることを明らかにした。彼は日本語の「彼は頭が痛いと言った」という文と対応する英語の“He said that he had a headache”とを比較し、日本語の文と英語の文を産出、理解する場合の過程構造の違いを究明した。それによると、日本語の文には、最初発話時点にあった視点が「頭が痛い」という出来事が成立する時点に移動し、宮下(1980)の言葉を借りるならば、「現在の関係」でそれを認識し、ついで発話時点に戻り、それは「過ぎ去った」過去の出来事であると認識するといった過程構造が内在されている。それに対し、英語の文には、視点は発話時点にあって移動せず、そこから“He had a headache”という埋め込まれた文と“He said……”という埋め込み文(母文; the matrix sentence)の表現する出来事を、前者と後者との前後関係をふまえて見通し、両方の出来事をともに過去の出来事としてとらえるという過程構造が内在されていることを明らかにした。前者のように、その産出と理解の過程で視点の移動を必要とする表現を「移動視点型」、後者のように発話時点に視点をすえ、そこから2つの出来事を見通す表現を「固定視点型」と称している。

日本語では、視座(の方が適切である)が時間軸にそって移動し、対象となる出来事を共時的に認識するので、そこに内在する認識の特徴は「点的」であるのに対して、英語のように異なる時点に起こった出来事を、時間軸上に線的に配置し、発話時点に固定した視座から見通すようにとらえる認識の仕方は「線的」と言う。

なお、後述する話法について、日本語では視点(座)が流動的であるために、間接話法が発達していないとの解説をも加えている。

②完了態の「一た」に着目する牧野(1978)の論 彼は、日本語のいわゆる条件文における完了態の「一た」に着目し、「ジャンケンに負けた人がきつぷを買に行く」といった文を、視点の移動によって説明している。

その説明によると、まずこの発話が「ジャンケン」が行われていない時点での発話であるこ

とに着目する。そこから、「一た」という完了態（又は、過去）表現が使えるのは、「……無意識の内に発話時点の視点が点線の矢印の所（時間軸上の、ジャンケンが行われ、その判定が出た時点とでも言える所）に移動するのではないだろうか。移動した時点から第1の行為（ジャンケンをする行為）を見るから完了態になるのであろう」と説明する。

この例文では、視座が未来の「ジャンケンに負けた」時点に移動し、そこを基点としてもう1つの出来事である「きっぷを買いに行く」がその先（未来）に位置づけられる。それに対して、「けんじが本を読んでいると、まさるが部屋に入って来た」（鈴木、印刷中）では、後者の出来事だけが物語表現に固有の過去の「一た」で標識化されているけれども、意味上では、2つの出来事とも過去形（文末の「一た」は文全体を支配する）であり、その基点は「一ている」形を使用して、「けんじが本を読んでいる」時点に設定されていると分析できる。つまり、本を読んでいる時点に視座をすえて、そこから「けんじ」の来室をその後の出来事としてとらえている。このように、牧野の分析は特殊なものではなく、日本語にかなり広く適用可能なものである。

以上2人の研究を概観すると、國広の分析は「時制の一致」に着目し、牧野の説明は未来形を主節の時制とする文中における完了態の「た」に着目して分析の手掛かりとしていることがわかる。言語学のアプローチは、三浦とは異なり、表面上に現れる具体的な特徴に基礎をおいた、その意味で客観的な方法を採用している。言い換えると、言語表現に現れる限りでの追究である。三浦のとは異なり、より実証性を重視する。

國広と牧野の研究では、移動するものは「視点」（むしろ、視座であるが）であるとされているが、柳原（1977）では、移動するものを、文の表現形式とその内容とによって、「拠点」の場合、「場面」の場合、そして「視点」の場合とに分けて考察している。ここではこうした概念上の議論は行わないが、いずれにしろ視点とそれに関わる概念をより厳密に定義することが必要であろう。参考に、ジュネット、G.（1985）では、「視点」の代わりに「焦点（化）」という用語を使用している。

最後に、山下清の日記の文章を分析した樺島（1971）を引用しておく：「叙述者の目が平行して移動して事件を現在のものとして描く……」。この山下清（1979）の文章は、日本語における時間的視点（座）の流動性や叙述における「現在の関係」という概念を理解する上で恰好の材料となろう。

(3)「物語世界への参加」について

Levinson, S. C.（1983）は、物語世界の原点の設定に密接な関わりを有する“deixis”について、“Person deixis”, “Place deixis”, “Time deixis”の3種類を区別している。この3つの要素は、物語世界の場면을構成する基本的な要素と呼ぶことのできるものである。しかしながら、物語や談話の鑑賞を目的とする従来の研究は、その中の「人」的要素にのみ重点を置いてきた。これは当然のことでもある。通常、物語（の世界）は、そこに生きる人々の世界であり、そこに生きる人々の時間・空間なのだから。読者は物語世界の中の時間を直接にはなく、そこに生きる人々を通して、その時間と空間を知ることになるからである。

時間は「自然の推移や意識の推移」を通して、そこから取り出されるものであり、「＜存在＞の認知においてあらわれる」ものである。時間は何者・事かを見つめる「まなざし」の中に、そこを定位の原点として、「対象あるいは出来事の関係のイメージとして発達してきた」ものである。言い換えると、「まなざし」のおこなう主体と対象との、又対象と対象との「関係づけ」

から抽象されるものである。(括弧内は、松岡, 1982)

心理学的に見ても、「人間」は最大の「図 (Figure)」であり、人を引きつける (salient) 最大の要素 (顔、そして眼) を備えた存在でもある。人は人に定位し、その人の思いを託されて視線とその対象とを追うのである。物語理解は、作中人物と「まなざしを、視線を共有し」、その共有された視線によって対象を捉えることによって、その時間を取り入れ、その空間を「共に生きる」のである。

物語の中で言う「人」とは、作中人物でも、又語り手でもありえる。物語は作中人物と語り手との交替劇でもあるから。作中人物の中でも、話者 (会話の) と視点人物とは特権的な存在である。発話 (会話) は、「話者に中心化されている」(Hörman, H., 1981) からであり、この意味するところを類推的に展開するならば、物語の世界は、「視点人物」に中心化されているからである。幼児はこの発話の特徴を最大限に活用する。「話す」ことは自分に他者の注意を引きつける最高の手段である。従って、幼児期初期のある時期には、1人称表現が省略されやすくなる。もちろん、子どもの視点を取り入れた母親の自分に対する呼称を、取り入れ、他の幼児との差別化を明確にするためには、自称詞として自分の名前を強調する場合も多い。

視点人物の特権性は、語り手の「寄り添う人物」であり、語り手が「もっともよく知っている人物」でもあり、さらに「作者の分身」でもあり、その内面描写を独占する存在でもある点に示される。

読者(又は、聞き手)における物語世界への参加は、読者、又は聞き手自身が備えている“me/here/now”を一時的に放棄し、作者(語り手)との共謀を図りながら、物語世界に自分の分身を派遣し、そこで中心的人物との一体化をおこない、その人物の“me”と共に、その“here”と“now”とを生きることになる。佐々木(1982)の紹介するラカンの言葉を借りるならば、「主体は、分裂を代償としてはじめて象徴界(ロゴス)に加入する」ことになり、その分裂は「子どもが抽象的な世界におけるコミュニケーションに参加をはじめること」から始まる。

前田(1983)の言葉を引用して、これまでの考察をまとめる:「文学テキストの読者は、語り手の視点を所有することで、あるいは作中人物が欲望や期待をはらみながら周辺の事物や他の事物にふりむけるまなざしを共有することでテキストの『内空間』を生きはじめる」、「私(読者)の身体は、生活世界における定位の中心としてここに位置づけられるが、げんに読みすすめている文学テキストに心をうばわれていくにしたがって、この現実の身体的な定位の中心はしだいに消失し、テキストの中にある仮構された定位の中心にとってかわられる。テキスト内の定位の中心は、恒常的な語り手、ないしは複数の登場人物であって、テキストに表現されている事物やそれを含む空間は、この語り手あるいは登場人物を中心に定位された空間として現出する。私はかれらのなかに入り込むことでテキストの『内空間』を生きはじめるのだ」(一部省略)。

前田は作品世界の定位の中心を「人」と見做し、空間はその「人」によって生きられる(媒介される)ものと考えている。時間については触れていないが、同様に作中人物によって生きられる時間を考えていると思われる。

それに対して、インガルデン, R. (1984) は、文学作品によって表象される世界を、空間的側面でもとらえるだけでなく、時間的側面でもとらえ、「空間的な定位の中心」と同様に、「時間的な定位の中心」をも考える:「空間の映発化にさいしてはつねに定位の中心が存在し呈示される世界へさまざまな仕方でも移し入れることができるように、呈示される時間にも類似の定位

原点と遠近法が存在する」。

前田, インガルデンのいわば文学的アプローチに対して, 市川(1986)は脱中心化によって物語世界への参加を解説する。彼は<いま・ここ・わたし>という3要素にもとづいて, 脱中心化を説明する。脱中心化とは, この場合, <いま・ここ・わたし>によって表現される原点から, <もう1人の私(他者)・あそこ・別な時>への「身の移し入れ」として捉え, その「身の移し入れ」には, 「……想像によって表象的な経験をしなければならない」と述べている。つまり, イメージの世界とイメージによる体験が必要なのである。

時間という側面で物語世界への参加を考えるならば, 「3人称+過去」といった物語表現に固有の特徴の習得といった面からも追究できるが, この点は後に回し, メンディロウ, A. A.(1976)による「作者(語り手)の時間」, 「読者(聞き手)の時間」, 「作中人物の時間」という区別によって考えてみることもできる。それは, 読者の時間が読みに伴って, 聞き手の時間へと変質し, 同時に語り手と, その時間を共有しながら, 作中人物の時間へと吸収されていく過程である。

物語世界への読者(聞き手)の参加は, 「人」に定位しておこなわれるものであるが, その「人」の生きる時間と空間とを抜きにしては捉えられない。物語の世界への入り口は, その世界に固有の「人」に加え, そこに固有の「時間」と「空間」も必要なのである。この3要素を手掛かりとして, 子どもは, 物語世界への入り口を探し, その世界を生きるはずである。この論は後の章において展開する。—続く—

補足: この論文は全8章から構成されている。本稿ではその内の2章分を掲載した。

引用文献

- Anderson, R. C., & Pichert, J. W. 1978 Recall of previously unrecalable information following a shift in perspective. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 17, 1-12.
- 有馬道子 1986 記号の呪縛—テキストの解釈と分裂病—勁草書房
- Barron, N. 1977 The acquisition of indirect reference-functional motivations for continued language learning in children. *Lingua*, 42, 349-364.
- Bates, E. 1976 *Language and context: The acquisition of pragmatics*. New York: Academic Press.
- Beilin, H. 1975 *Studies in the cognitive basis of language development*. New York: Academic Press.
- Black, J. B, Turner, T. J., & Bower, G. H. 1979 Point of view in narrative comprehension, memory, and production. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 18, 187-198.
- Bühler, K. 1982 The deictic field of language and deictic words. In R. J. Jarvella, & W. Klein (Eds.), *Speech, Place, and action*. Chichester: John Wiley & Sons, 9-30.
- Coates, J. 1988 The acquisition of the meaning of modality in children aged eight and twelve. *Journal of Child Language*, 15, 425-434.
- Cromer, R. F. 1971 The development of the ability to decenter in time. *British Journal of*

- Psychology*, 62, 3, 353-365.
- Ertel, S. 1977 Where do the subjects of sentences come from? In S. Rosenberg (Ed.), *Sentence Production*. New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates, 141-167.
- Friedman, W. J. 1978 Development of time concepts in Children. In H. W. Reese, & L. P. Lipsitt (Eds.), *Advances in child development and behavior*, Vol. 12. New York : Academic Press, 267-298.
- ジュネット, G. 1985 物語のディスコース方法論の試み—花輪 光・和泉涼一共訳 風の薔薇社
- Harner, L. 1976 Children's comprehension of linguistic reference to past and future. *Journal of Psycholinguistic Research*, 5, 65-84.
- Harner, L. 1980 Comprehension of past and future reference revisited. *Journal of Experimental Child Psychology*, 29, 170-182.
- Hörman, H. 1981 *To mean-to understand*. Berlin : Springer Verlag.
- 市川浩 1986 精神としての身体 勁草書房 第5刷
- 今井文男 1968 表現学仮説 法律文化社
- インガルデン, R. 1984 文学的芸術作品 瀧内慎雄・細井雄介共訳 勁草書房 第2刷
- 岩淵悦太郎・他 1968 ことばの誕生 日本放送出版協会
- ヤコブソン, R. 1984 幼児言語の文法形成 ホーレンシュタイン, E. 認知と言語—現象学的探求— 村田純一・他共訳 産業図書 239-262.
- 樺島忠夫 1971 文章表現に「視点」は存在するか 表現研究 第14号 41-47.
- Kuczaj, S. A., & Boston, R. 1982 The nature and development of personal temporal-system. In S. A. Kuczaj (Ed.), *Language development*. Hillsdale : Lawrence Erlbaum Associates, 365-396.
- Kuczaj, S. A., & Dally, M. J. 1979 The development of hypothetical reference in the speech of young children. *Journal of Child Language*, 6, 563-579.
- 國広哲弥 1979 意味と英語動詞 by Leech, G. N. 國広哲弥訳 訳注 大修館書店
- Langacker, R. W. 1987 *Foundations of cognitive grammar*, Vol. 1. Stanford : Stanford University Press.
- Levinson, S. C. 1983 *Pragmatics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 前田 愛 1983 都市空間の中の文学 筑摩書房
- 牧野成一 1978 ことばと空間 東海大学出版局
- 松岡俊吉 1982 イメージ・シンキング 弓立社
- メンディロウ A. A. 1976 小説と時間 志賀謙・他共訳 早稲田大学出版局
- Miller, P. J. & Sperry, L.L. 1988 Early talk about the past : the origin of conversational stories of personal experience. *Journal of Child Language*, 15, 293-315.
- 宮下眞二 1980 英語はどう研究されてきたか 季節社
- 三浦つとむ 1973 日本語はどのような言語か 季節社 第4刷
- 村瀬 学 1981 初期心的現象の世界—理解の遅れの本質を考える—大和書房
- 大江三郎 1976 日英語の比較研究—主観性をめぐって—南雲堂 第2刷
- Piaget, J., & Inhelder, B. 1948 *The children's conception of space*. London : Routledge Kegan Paul (1963).
- Piaget, J., & Inhelder, B. 1966 *The psychology of the child*. London : Routledge Kegan

- Paul (1969).
- Pichert, J. W. , & Anderson. R. C. 1977 Taking different perspectives on a story. *Journal of Educational Psychology*, 69, 4, 309-315.
- 佐伯 胖 1978 イメージ化による知識と学習 東洋館出版社
- Sachs, J. 1983 Talking about the there and then : the emergence of displaced reference in parent-child discourse. In K. F. Nelson (Ed.), *Children's Language, Vol. 4*. Hillsdale : Lawrence Erlbaum Associates, 1-28.
- 西郷竹彦 1975 西郷竹彦文芸教育著作集—17 文芸学講座(1)—明治図書
- 佐々木孝次 1982 主体の分裂 雑誌『現代思想』 7月号 青土社 40-52.
- 鈴木情一 (印刷中) 視点の言語心理学的研究—共感度操作によるダイクシス再編成—読書科学
- 上野直樹 1981 物語のもつカメラ・アングルの記憶について 教育心理学会第23回総会発表論文集 58-59.
- 山下 清 1979 裸の大将放浪記 第4巻 ノーベル書房 第2刷
- 柳原伊織 1977 拠点, 場面, 視点の移動—日本語テンスを考える—慶応大学言語文化研究所紀要10, 267-277.

Temporal Shift of a Point of View in Narrated Comprehension and Production

—A Literature Review (1)—

Seiichi SUZUKI

ABSTRACT

Many studies on the development of tense and time concepts have been taking over past years, but they didn't inquire into the underlying cognitive process in producing and/or comprehending a temporal expression in general.

In producing and/or comprehending a linguistic expression, we need to separate our ego ideally, and next to get into the world of cognitively-constructed.

Particularly on the temporal expression, it needs to shift a point of view along the temporal axis in the narrating and/or narrated world.

On the basis of such a theoretical presupposition, an attempt is made to construct an unified model for explain underlying cognitive processes in processing some sorts of temporal expressions.

Small themes issued in this paper is as follows : "Temporal decentering in the early childhood" , "Two approaches to language development from the theory of a point of view" , "Ideal separation of reader's ego in reading" , "Getting into the world narrated".